

完了報告書（平成 24 年度）

提出者 水野英莉

提出年月日 2013 年 1 月 30 日

【プロジェクト名】

和文 「身体化」される親密圏・公共圏——医療、感情労働、セクシュアリティ

英文 “Embodied” Intimate and Public Spheres: Medical Care, Emotional Labor and Gender/Sexuality

【メンバー構成】

研究代表者 水野英莉（京都大学大学院文学研究科 GCOE 研究員）

メンバー 青山薫（神戸大学国際文化学研究所 准教授）

入江恵子（京都大学大学院文学研究科 GCOE 研究員）

上尾真道（京都大学人文科学研究所 学術振興会特別研究員 PD）

柴田悠（同志社大学政策学部 任期付准教授）

戸梶民夫（京都大学大学院文学研究科 GCOE 研究員）

中岡志保（京都大学大学院文学研究科 GCOE 研究員）

濱野健（京都大学大学院文学研究科 GCOE 研究員）

藤坂恭子（京都大学大学院文学研究科 GCOE 研究員）

百木漠（京都大学人間・環境学研究所 博士後期課程）

渡邊拓也（京都大学大学院文学研究科 GCOE 研究員）

【ねらいと目的】（600 字程度）

近年の親密圏・公共圏に関する研究においてしばしば指摘されるのは、両者の境界線が曖昧化し、それを明確に区分することが不可能となっているということである。かつては私的領域に属する事柄は、近代社会においてはむしろ公的関心の対象となり、良かれ悪しかれ、政治的な意味合いを帯びざるを得なくなった。さらに、そうした公的関心をこれまで規定してきた国民国家体制や家族制度の枠組みは、今日、後期近代のグローバル化とともに様々な局面で限界を迎えており、それに代わる親密圏・公共圏の新たな組織化が模索されている。

本プロジェクトの目的は、以上のような現状分析をさらに精緻化するとともに、「再本質化」のキーワードを軸として、新たな親密圏・公共圏が構築されるさまを、ジェンダー／セクシュアリティ・労働・医療の三つの主要な観点から検討することである。医療の変容、感情労働の増加、ケアの市場化、生殖技術の発展、性的少数者の問題分析などをめぐる、理論・歴史研究とフィールドワークを交えた具体的な分析を通じて、今後の社会における「親密圏・公共圏の再編成」の展望を描き出すことを目標とする。

なお、本プロジェクトは前年までの次世代ユニット「親密圏の再帰的近代化と公共性の第三の転換をめぐる研究」における親密圏・公共圏の理論・思想史的再検討や、次世代研究「性的市民性と性的少数者運動の公共圏変容」における性的少数者の公共性や繋がりの可能性についての研究成果を引き継ぎ、これらの成果を総括するものである。

【活動の記録】

研究会・ワークショップの場合は、開催年月日、報告者と報告題等
調査の場合は、調査年月日、調査者、調査地、調査目的等
その他の活動も含めて、研究期間中の活動について簡潔に記してください。

2012年度

4月26日

第1回研究会：各自研究テーマについての発表と、申請書作成についての打ち合わせ

6月1日

第2回研究会：今後のスケジュール、予算と報告書のテーマについての打ち合わせ

9月6日

第3回研究会：個別発表（報告者：濱野健、入江恵子、渡邊拓也）

10月26日

第4回研究会：個別発表（報告者：百木漠、上尾真通、柴田悠、水野英莉）

11月3 - 4日

学会参加：日本社会学会第85回大会（水野英莉、百木漠）（於：札幌学院大学）

12月15日

研究会参加：（水野英莉）（於：東京大学）

12月16日

第5回研究会：章立てとタイトルについての打ち合わせ

12月21 - 23日

シンポジウム参加、資料収集：（入江恵子）（於：立教大学、国立国会図書館）

12月27日

調査：（水野英莉）（於：岡崎市高根山公民館）

12月28日

第6回研究会：草稿の確認と書類作成

12月29日

研究会参加：（水野英莉）（於：東海ジェンダー研究所）

2013年度

1月12日

第7回研究会：最終原稿の確認、編集作業と報告書提出についての打ち合わせ

【成果の概要】（800字程度）

本プロジェクトにおける当初の計画では、「身体化」をテーマに据えていた。しかし、研究会において議論を重ねることにより、近代社会にみられる「再本質化」が問題の本質であるという合意に至り、テーマを『「再本質化」される親密圏と新たなシチズンシップ』として再設定した。結果として、以下の成果が得られた。

水野は、今日もなお女性の問題として、女性の身体に還元される不妊の問題をとりあげ、背景にある社会問題と不妊治療の最新の動向を整理し、現在選択可能な解決方法を提示した。

入江は、インターセックス／DSDの当事者による社会運動における変容を扱い、一度は脱身体化した問題関心が再度、医療化の流れにのって、身体へと還元されていることを指摘した。

柴田は、子どもの貧困問題を指摘し、その「効率的」な解決方法のひとつとして高齢者の労働力、特に女性高齢者スタッフを活用した子育て支援に着目した。そして、高齢者を起用した保育サービスの現場から見える課題と可能性を指摘した。

濱野は、オーストラリアへ移住し、結婚生活を続ける女性が置かれた状況を分析した。従来とは異なるあり方の「親密圏」においてなお、母親役割を通じてジェンダーアイデンティティが再本質化されていることを指摘した。

上尾は、「こころ」をテーマに、近代精神医療実践について近代医学史の視点から分析し、社会が新自由主義へ傾倒するのに伴い、新しい体制（「こころの配慮」）へと移行することを指摘した。

百木は、公共性を帯びた労働の肯定的側面に着目し、具体的な実践例を挙げながら「労働」と「政治」が合致することにより、新自由主義的な現代社会を生きぬくことができるような新しい働き方の可能性を指摘した。

渡邊は、「現代型うつ病」の診断プロセスとそれに対する社会からのフィードバックという逸脱の医療化の問題を指摘した。また、背景にある日本社会における、キャリア教育をはじめとした「感情マネジメント」を推進する新自由主義的な社会の在り方との関連を指摘した。



研究会の風景

